

同志社大学

2011年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2012年 2 月 3 日提出

所 属	職 名	氏 名
心理学部	准教授	石川信一
研 究 題 目	児童の不安障害に対する家族認知行動療法	
研 究 成 果 の 概 要	<p>本研究の目的は、児童の不安障害における家族を対象とした認知行動療法 (CBT) を開発し、その有効性を検討することであった。本年度は、同志社大学研究倫理委員会の「人を対象とする研究計画等審査」の承認を受け研究を開始した。まず、先行研究と海外のプログラムを参照しながら、本邦の児童を対象とした CBT プログラム (いっちゃんが教室) の開発を行った。その結果、全 10 回の子どもと親に対する CBT プログラムが開発された。</p> <p>その後、児童の夏休休暇期間に、同志社大学心理臨床センターにおいて開発されたプログラムの有効性の検討を行う実践研究に着手した。対象者の募集はコミュニティ誌等を通じて行われた。問い合わせのあった家族について、電話による簡単なスクリーニングを行い、不安の問題を抱えている可能性のある児童については事前面接に参加してもらった。事前面接では、①プログラムで行う内容、期待される効果等を親子に説明し、書面によるインフォームドコンセント、②半構造化面接の実施、③質問紙調査 (の実施が含まれた。包含基準と除外基準に準じて 15 名の参加が認められた。</p> <p>本年度の 7 月～9 月の間に、参加が確定した対象者について集団 CBT プログラムを行った。プログラムは週に 1 度のペースで全 10 回開催された。全ての親は児童のプログラムを見学するとともに、全 4 回の親セッションにも参加が求められた。プログラムのリーダーは著者が努め、コリーダーとして共同研究者である心理臨床センター相談員も参加した。プログラムはマニュアルに沿って実施され、全てのセッションが録画にて記録された。最終的に 12 名が 10 回のプログラムに参加した。</p> <p>プログラム終了時点で、完遂者の 33.33% が主たる不安障害の診断から外れた。また、3 ヶ月時点では 66.67% が主診断から外れるとともに、33.33% は全ての不安障害の診断から外れることが明らかになった。親評定による子どもの不安障害の症状尺度、及び子どもの自己報告による抑うつ尺度については、統計的に有意な治療効果がみられた。以上の結果を踏まえ、来年度はこの成果について学術論文で発表する予定である。</p>	